

ユミール史を始め Vämbéry, Hirth 氏など皆之をトルコ種といひ、St. Martin, Richthofen 氏などはチベット種として居た、Klaproth 氏はもとチベットといふて居たのをとりけして更にインドゲルマーネン説を稱へ、近くは Franke 氏なるもの得意の論文なる *Beitrage aus chinesischen Quellen zur Kenntniss der Türkvölker und Skythens zentral Asiens* でインドゲルマーネン説を唱導した、そして支那に所謂月氏民族が西洋に傳くるトカラ民族と同一のものであることは殆んど全く疑をいれる餘地はないと思ふ、西洋には早く紀元前一世紀の頃からトカラと云ふ名が傳はつて居るのに支那の正史では始めて魏書に見えて居るのは年代の上に五百年ばかりも相違があつておかしいとせられて居たけれども、これも既に後漢書や晋書に兜勒の字であらはれて居るし、殊に晋書の樂志に書いて居る所によると、張騫が西域にいつたときその兜勒の音曲を傳へて來たとしてある、張騫の時代ならば丁度西洋では Justin が始めてトカラの名を傳へて居るころであつて東西ともに記述が一致することとなる、とにかく月氏とトカラとは同體異名であつて、人種としてはインドゲルマーネンに屬するものであることは今日承認して差支ないと思ふ、しかし茲に注意せねばならぬことは、月氏の亡びたのは宋雲の記する處などから考へて見ると、先づ五世紀の末の方と思はれるが、トカラといふ名は、ずっと後迄殘つて居り、ことに玄奘の如きは此地の文字を記して『字源二十五言、轉而相生、用之備物、書以橫讀、自左向右』とかき、書記の類も頗る多いといふて居る、それでトカラの經なるものが、今日に存して居るとすれば、或は月氏以後のものではないかとも考がへられるけれども、よく詮索するとやはり月氏のものと思はれる、なぜならば月氏が之れを紀末に亡びてからは、バルク一帯の地方即ちトカラ地方は佛教を排斥した嚙噠族の根據地となり、そのまた後の唐の時代には突厥がこゝ